

スペインにおける＜社会文化アニメーション＞概念の研究

増 山 均

はじめに

＜社会文化アニメーション（Animación Sociocultural 西語、Animation Socioculturelle 仏語）＞の概念は、経済の高度成長に伴い、産業社会において人間生活を歪める危機的状況が生じたことに対して、人間本来の主体性と創造的な内的活力を活性化させる方法理念として、1960年代のフランスに登場した。1970年代になると近隣諸国スペイン、スイス、イタリア、ポルトガルへと伝播し、その後スペイン語・ポルトガル語圏である中南米諸国にも広範に伝えられ、教育、文化、芸術、芸能、スポーツ、祭典、社会活動などの広い分野で使われている概念である。1980年代にユネスコの文化政策⁽¹⁾の発展の中で、社会改革の方法としての社会文化アニメーション（以下 ASC と略す）への注目がなされたことにより、広くヨーロッパ諸国にも伝えられ、近年ではヨーロッパ諸国やアメリカにおける近似概念との比較研究⁽²⁾が積極的になされている。

特にスペインでは、フランコ独裁政権下の1960年代からフランス語の文献を通じて、いち早く ASC への注目がなされ、フランコ政権が幕を閉じてスペインの民主化が始まる1977年以降、ASC の研究が急速に発展していく⁽³⁾。

小論は、スペインにおける ASC 研究の主要な文献を手がかりにしつつ、特にその概念把握について検討することを目的としている。

一．＜社会文化アニメーション＞に関する研究の紹介と展開

ASC は人間の自発性・自律性にもとづいて社会活動に主体的に参加し、文化の享受と創造を通じて精神を活性化させ、自己実現をとげていくプロセスに着目する。従来の民衆教育のように、知識人が所有する文化を一般民衆に普及しようとする啓蒙的性格とは異なる民主主義的原理を有している。人民戦線期のフランスでは、1936年に40時間労働制および有給休暇制度の成立によって勤労者大衆が余暇の権利を獲得し、彼らの多様な文化活動へのニーズの高まりの中で ASC 発展への土壌が耕された。

第二次大戦後の1959年には文化事業省が発足し、初めて国立民衆教育研究所によるアニメーター（animateur、ASC の担い手）の研修が開始されて、文化政策を重視し文化の力による社会

発展の推進が加速する。共和制民主主義社会の活性化とそれを支える主体の形成にとって ASC が不可欠であるという政策理念に裏づけられて、1960年代から国家計画の一環として文化施設の充実とそこで働く専門職員の養成に力が注がれる。1960年代の取り組みの蓄積にもとづいて、1964年には ASC を遂行するアニメーターの免状創設の動きがあり、1970年には青少年・スポーツ省がアニメーション適性証書を制定するなど、ASC に関わる職員の専門職化が進み ASC の社会的認知が拡大した¹⁾。

フランスにおけるこうした ASC をめぐる動向は、1960年代の半ばフランス語の文献〔Hermelin, Ch (1964)『文化アニメーション (L'Animation culturelle)』(Ouvrières, Paris) など〕を通じて、いち早くスペインに伝えられ、1972年には ASC に関する最初のスペイン語の著書『社会と文化のアニメーション (La Animación Social y cultural)』(Marsiega, Madrid) が Antonio del Valle によって編集出版される。

しかし ASC についての関心が高まり本格的な研究が開始されたのは、フランコによる独裁政権が幕を閉じ、立憲君主制下でスペイン史上初の自由選挙が行なわれ、アドルフォ・スアレス首相が民主主義にもとづく国づくりを開始した1977年以降のことである。

1980年代になると、Ander Egg, E. (1981)『ASC の方法論と実践 (Metodología y práctica de la Animación Sociocultural)』(Marsiega, Madrid)をはじめ、次々に ASC に関する著書が出版されている。その後、1982年の総選挙で勝利したフェリペ・ゴンサレス社会労働党政権の下で、社会と文化全般にわたる民主化が推進され、四つの言語圏からなるスペイン各地域の自治権（自治州）が強められた。

独自の民族意識と文化的伝統を持つカタルーニャ地方では、教育自治権の確立によってカタルーニャ語による教育を軸にしながら、社会と文化の活性化のための社会教育活動・文化活動への期待が高まり、ASC への関心が広がった²⁾。カタルーニャ州では、1987年から社会教育 (educación social) の免許の中に ASC に関する学習内容が盛り込まれ、継続的に3年間の課程を学ぶことによって専門的なアニマドール (Animador) の資格が与えられるようになる³⁾。こうした動きに合わせて、1990年代から ASC に関するテキストや入門書、研究書、講座などが次々に発行されるとともに、アニマドールの諸実践を踏まえた理論書が纏められている⁴⁾。

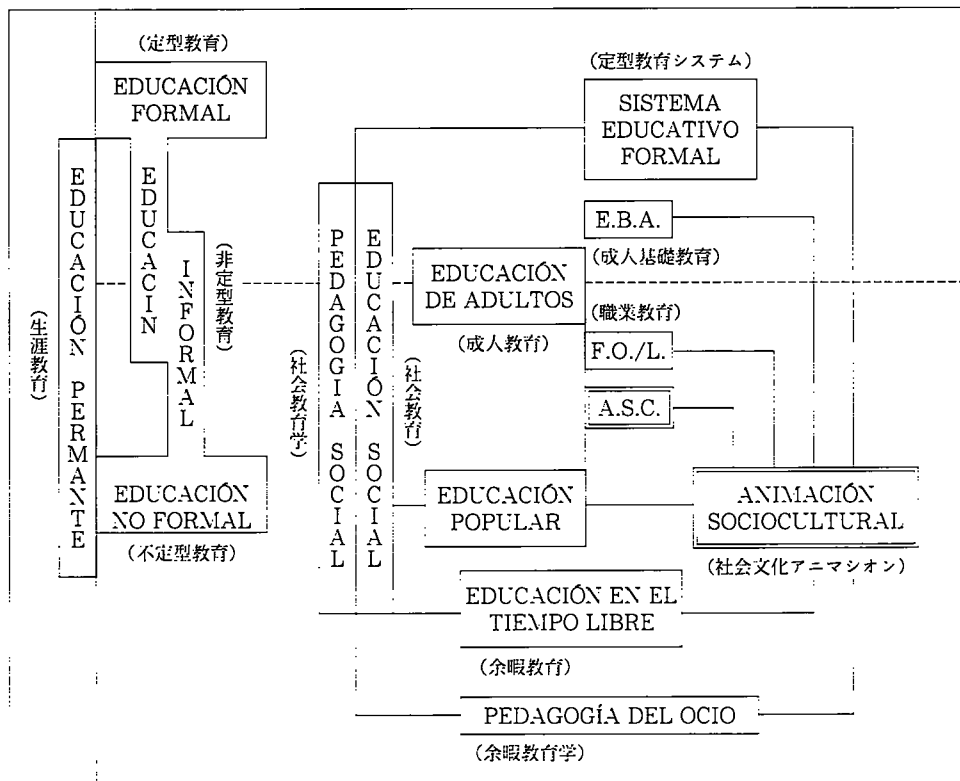
それら ASC 関連図書の中で、特に注目すべきものにバルセロナ大学教育学部教授 Jaume Trilla がコーディネーターとなってまとめた『社会文化アニメーション—理論・計画・領域 (Animación sociocultural - Teorías, programas y ámbitos)』(Ariel Educación)⁵⁾がある。この著は、初版が1997年に編集され2004年に第2版が出版されたが、カタルーニャ州内外の第一線で活躍する18人の研究者・実践者により執筆された ASC の理論と実践に関する包括的テキストといえるものであり、多くの読者に指針を与えている。

二. 教育学理論から見た＜社会文化アニメーション＞—教育学における近似概念の検討

スペインの教育学理論は、教育現象を社会問題や文化とのかかわりで広い視点から捉えようとする意識が強いのが特徴である。Jaume Trilla は、社会教育（Educación Social）が専門だが、『学校外教育と余暇の教育学（La educación fuera de le escuela, pedagogía del ocio）』、『非定型教育（La educación informal）』、『別の教育—社会文化アニメーション、成人教育、教育的な街（Otras educaciones—Animación sociocultural, formación de adolitos y ciudad educativa）』などの著書を精力的に出版して、定型教育（educación formal）の相対化を試みている。

現実的には学校教育の影響力が強いのはスペインでも同じだが、教員養成や社会教育の専門職養成の中で、学校教育（定型教育＝educación formal）以外の教育（不定型教育＝educación no formal、非定型教育＝educación informal および社会教育＝educación social、社会教育学＝pedagogía social、余暇教育学＝pedagogía del ocio、自由時間教育＝educación en el tiempo libre）へと教育概念を広げて捉え、さらには ASC の概念を重視して、市民生活・社会文化・コ

【図表 1】ASCと教育学の諸概念との関係



Xavier Ucar (1992): La animación sociocultural (Ediciones CEAC) P.47
の図に筆者が余暇教育学（Pedagogía del ocio）を加筆した。

コミュニティ発展のかかわりの全体構造を視野に入れて人間発達の問題を捉えようとしている点が重要である。

Jaume Trilla は、先の編著『社会文化アニメーション理論・計画・領域』の巻頭論文「ASC 概念の歩みとその世界」のなかで、教育学における近似諸概念（＜生涯教育＞＜社会教育＞＜社会教育学＞＜不定型教育＞＜非定型教育＞＜余暇教育学＞＜自由時間教育＞）と ASC 概念との関係について独自の検討を行なっている〔図表 1〕¹²。

Jaume Trilla によれば、＜生涯教育＞は教育の全体世界を語る上で最も大きな概念であるので、従来 ASC が教育の次元の承認を得るために＜生涯教育＞と関連性があることを好都合に使ってきたが、厳密に ASC の定義をする場合には、この概念が大きすぎて役に立つ概念ではないという。

＜社会教育＞および＜社会教育学＞の概念との関係については、ASC の専門課程化が＜社会教育＞の分野に位置づけられてきたものの、全体としての ASC 概念をそこに受け入れきることは出来ないという。なぜなら、＜社会教育学＞では、固有の教育対象（たとえばマージナルな人々の初等教育の必要など）に限定するが、それに引き換え ASC では楽しみ・喜びとしての文化や祭りや余暇など拡がりある分野によって、関係者たちを広く受け入れる方法論をとるからである。社会教育にしても社会教育学にしても、最終的には固有の対象が「社会」の方へ移るがゆえに、「社会」と「文化」を隔離することになるのではないかというのである。

「教育」と名のつく概念はいずれも何らかのプログラムと手順にもとづいて人間の発達を促すものだが、ASC の方法・機能の特徴は＜不定型教育＞とより適応的であり、＜非定型教育＞の形態に近似的だという。なぜなら、それらは共に受益者の具体的な必要性和興味・関心に依拠し、住民自身が活動に参加する方法を重視するからである。ASC によって促進された具体的な活動は＜不定型教育＞であると同時に、民衆の祭りや要求活動などの＜非定型教育＞の形態とも重なる。一般に教育の概念は＜定型教育＞＜不定型教育＞＜非定型教育＞へと三分類されるが、実は＜定型教育＞の中にも＜不定型教育＞および＜非定型教育＞の要素（たとえば「隠れたカリキュラム」と呼ばれているものや、マスメディアの影響など）が含まれているので、それらは厳密に区切られているわけではない。ASC の特色は、三者の仕切られていない境界を乗り越える透過性にあり、三者の機能の協働を生み出し相互関係を強化するところにあるという。

＜余暇教育学＞および＜自由時間教育＞と ASC の関連については、それらは「社会教育」が膨らんで行く部分にあたることを捉えている点に共通性がある。＜余暇教育学＞および＜自由時間教育＞は、一般に「子ども」を対象とした活動（たとえば「児童館」や「山の家」や「子どもクラブ」など）をイメージさせるが、ASC は市民センター・青少年センター・文化の家など「若者」と「成人」をも広く対象に含めて捉えており、両者の違いがクライアントの年齢にあるという見解が見受けられる。しかし、ASC は「子ども」も含めた「高齢者」まで全ての年齢を

対象とした取り組みを包括している。＜余暇教育学＞および＜自由時間教育＞の特徴としては、クライアント自身が教育の主体であり自らを教育することに重点がある。それに対して ASC は、クライアントが「活気づく (animable)」「活動的になる (dinamizable)」ことに特徴がある。

アニマドールや余暇施設のモニター（指導員）は、その取り組みを通じて確かにクライアントの発達を促す教育的仕事をしてきたので、＜余暇教育学＞＜自由時間教育＞という「教育学」の範疇で捉えることも出来るが、ASC の取り組みには文化・コミュニティ・参加などの概念が含まれており、「教育学」のみでは捉えられず、「心理学」「文化人類学」「社会労働」などの多様な学際的アプローチが必要となる。

以上が教育学における近似諸概念と ASC との関係に関する Jaume Trilla の見解である。

三. ＜アニメーション＞＜社会文化アニメーション＞の定義をめぐって

1. ＜アニメーション＞とは何か

1992年の秋から、スペイン国内の50名を超える研究者と実践者が共同で編集・執筆した講座「アニマドール養成プラン (Plan de Formación de Animadores)」(Editorial CCS, Madrid) 全38巻は、ASC に関する最も包括的かつ実践的な文献といえる⁽¹⁰⁾。

その中の基礎的文献である Antonio Sánchez Sánchez 著『今日のアニメーション (La Animación Hoy)』によれば、ASC の定義は論者により多義的で、不明確さと曖昧さから逃れられないとしつつも、その語源的定義は、「活気を与える (animar)」こと、「命を与える (dar vida)」こと、「魂を注入する (inyectar ánimo)」こと、「活動的にする (dinamizar)」ことと説明されている。

＜アニメーション＞の語義は第一に「命を与えること」である。すなわち力と魂と勢いを、それのないものに、あるいはそれがあってもかかわらず失っているものに注入することを意味する。フランス人研究者 Ambles, H. による「アニメーションとは、vida (命・活気) そのものである。命を認め、命にさらなる活気を与え、活気を生み出し成長発達させること、つまり、止まることのない成長発達を全体的に統合する活動である」⁽¹¹⁾ という定義は良く＜アニメーション＞の本質を表現したものとしてスペインに紹介されている。この定義に加えて、Jaume Trilla が「活気を与える (animar)」をさらに掘り下げて、「ある状態の側面を楽しく・快いもののもと、喜び・楽しさを伝え人々の一致の動きを起こすこと、勇気と気力と努力を獲得すること、思い切った力を生み出すこと」⁽¹²⁾ と説明していることを付け加えれば、＜アニメーション＞の本質理解はより総合的になる。

＜アニメーション＞は人間個人のみならず人間集団に「命を与えること」を求める。社会構造や生活条件の障碍のために、活気ある生活が制限されたり遮断している人々の集団に「活気を与える (animar)」「活動的にする (dinamizar)」ことを求める。それを実現するために「行動 (acción)」

や「関与 (intervención)」が必要となり、当事者の「参加 (participación)」が重要な要素となるのである。こうした<アニメーション>の過程、個人と集団に力を与えるプロセスそのものが<ASC>であり、①「行動を起こすこと」に重点を置きつつ、②「関係を生む・関係づける」ことに注目し、その結果として③「人間が発達し」「集団・組織が発展する」ことになる^①。

『今日のアニメーション』の著者 Antonio Sánchez Sánchez によれば、<アニメーション>の原理的目的は、第一に活動の行為者を「自己教育の主体」にすること。第二に、人間が暮らしている現実を良く知り「現実社会を熟考する能力」「反省的活動の能力」を高めること。第三に、人間的に連帯した社会関係を築き上げる「連帯の能力」を育てること。そして第四に社会組織の再構築を試みるだけでなく、方向づける力をもって社会の変革に協力すること、すなわち「変革の能力」を獲得することだとしている^②。

<アニメーション>の内容は、まず第一に「命を与えること (dar vida)」であり、第二は「関係を結ぶこと (poner en relación)」、そして第三に「コミュニティの発展に参加すること (participar en la desarrollo de la comunidad)」であるとしているのは通信教育用のテキスト Pérez, S.G.y Péres de Guzmán, M.V.『ASC とは何か (Qué es la Animación Sociocultural)』(Narcea, Madrid) である。通信教育大学 (UNED) の教員たちによって執筆され、2006年に出版された著書に記された以上の3点は「アニメーションとは何か」という問いに対する様々な答えの最大公約数と言えよう。

2. <社会文化アニメーション>とは何か

(1) いろいろな学説——1970年代から90年代までの整理のこころみ

「ASC とは何か」、その定義は「アニメーションとは何か」以上に難しい。先の通信教育用のテキストには ASC の性格として、①参加 (participación)、②連帯した生活 (vida asociativa)、③生活の質の向上 (mejora de la calidad de vida) の3項目が掲げられているが、フランスから伝播して以来、スペインでは繰り返し繰り返し多くの著書で「ASC とは何か」が論じられてきた。そして今も論じ続けられている^③。

ASC をめぐる定義について検討する場合の手がかりになる文献は、Sara de Miguel Badesa (1995)『社会文化アニマドールのプロフィール (Perfil del Animador Sociocultural)』(Narcea) である^④。Sara de Miguel Badesa はこの著の中で、1970年代から1990年代にかけて出版された代表的な著書24冊を検討・分析し、各論者による ASC の<概念>およびその<目的>の捉え方の違いを検討している。そこで取り上げられている著者と著書を、出版された年代順に記すと次のようになる。(★印は、フランス語文献)

①Del Valle, A. (1972): La Animación Social y cultural. Madrid: Marciega. Colección Fondo de Cultula Popular.

- ②★Simonot, M. (1974): Les animateurs. Etude d'une aspiration à une activité sociale. París: PUF.
- ③Grosjean, E. (1980): Implicaciones de una politica de Animación Sociocultural. Madrid: Colección Cultura Y Comunicación. Ministerio de Cultura.
- ④★Hicter, M. (1980): Pour une démocratique cultrelle. Bruselas: Direction Générale de Jeunesse et des Loisirs de la C.F.
- ⑤Simpson, J.A. (1980): Animación Sociocultural y Educación Permanente. Col. Cultura y Comunicación. Madrid: Ministerio de Cultura.
- ⑥★Weisgerber, P. (1980): La formation des animateurs. Cahiers, Jeb. 5. Bruxelles.
- ⑦Ander-Egg, E. (1981): Metodología y práctica de la Animación Sociocultural. Madrid: Marsiega.
- ⑧★UNESCO (1982): Conférence mondiale sur les politiques culturelles. México (26 juillet 6 août). Rapport final. París.
- ⑨Barrado, J.M. (1985): La Animación Sociocultural o la historia de un sufrir. Ponencia presentada en las Jornadas de Animación Juvenil, Vitoria, 21, 21 y 23 de Noviembre.
- ⑩Quitana, J.M.^a (1985): Fundamentos de animación sociocultural. Madrid: Narcea.
- ⑪Caride, J.A. (1986): La Animación Sociocultural en zonas deprimidas. Madrid: Referencias. Ministerio de Cultura.
- ⑫De la Riva, F. (1986): La Animación Sociocultural y la motivación para la participación en las Universidades Populares. En Puente, M. y otras: Perspectivas para la educación Fondo de adultos. Barcelona: Humanitas.
- ⑬Viché, M. (1986): Animación sociocultural y educación en el tiempo libre. Valencia: Victor Orenge.
- ⑭Castro, A. DE (1987): La Animación Sociocultural. Nuevas perspectivas. Madrid: Popular.
- ⑮Gómez Pérez, C. (1987): La Animación sociocultural. Conceptos fundamentales. Madrid: Documentación social n.º 70. pp.11-32.
- ⑯Lahoz, P. (1987): La Animación Sociocultural. Revisión del concepto, ámbito y funciones en la sociedad acutual, Madrid: Revista de Ciencias de la Educación n.º 19, enero-junio.
- ⑰Puig Rovira, J.M.^a (1987): La pedagogía del ocio. Barcelona: Laertes.
- ⑱Martín, A. (1988): Pedagogía Humanística, Animación Sociocultural y problemas sociales. Madrid: Popular.
- ⑲Puig Ricart, T. (1988): Animación sociocultural, cultura y territorio. Madrid: Popular.
- ⑳Cambranos, F. y otros (1989¹⁷): La Animación Sociocultural: una propuesta metodológica.

〔図表2〕ASCの概念に関するさまざまな著者の見解

	ASCとは何か											ASCの目的は何か														
	社会政策	社会現象	活動の総体	指導のプロセス	社会活動の技術	関与のモデル	方法論	活気づけ・援助・意識づけ	応用科学	調停機能	総合的な行為	手段	集団活動	関与の方法	努力喚起	参加	自覚化	社会と文化の発展	人間のコミュニケーション	生活の質	社会の改革	社会統合	社会の活性化	社会と教育の民主化	個人の発達	自発性の刺激と参加
ANDER-EGG	✓															✓			✓	✓						
BARRADO		✓																				✓				
CARIDE			✓													✓	✓			✓	✓	✓				
DE CASTRO			✓													✓										
CEMBRANOS					✓													✓							✓	
DE LA RIVA					*											✓		✓	✓							
DEL VALLE			✓																			✓		✓		
G. PÉREZ						✓																		✓		
GROSJEAN															✓			✓							✓	✓
HICTER						✓															✓					
IZQUIERDO							✓														✓					
LA HOZ															✓			✓						✓		
MARTÍN								✓										✓							✓	
MARZO Y FIGUERAS									✓						✓						✓					✓
MONERA										✓																✓
GRIÉGER									✓							✓	✓								✓	
PUIG RICART															✓				✓							✓
PUIG ROVIRA												✓				✓			✓							
QUINTANA	✓								✓					✓		✓		✓	✓							
SIMONOT		✓																			✓					
SIMPSON											✓													✓	✓	
UNESCO	✓															✓										✓
VICHÉ													✓												✓	
WEISGERBER									✓																✓	

Sara de Miguel Badesa: Perfil del Animador Sociocultural p.49-50を合成して筆者が作成した。なお、引用書の一覧表には、DE LA RIVAについて「ASCとは何か」に関するチェックがなかったが、本文p.45.の内容から「社会活動の技術」の項目が妥当であると判断して、その項目に筆者が*を付した。

Madrid: Popular.

②Izquierdo, C. (1989): La Animación Sociocultural en los centros penitenciarios. Madrid: Revista de Fomento Social, 176.

③Monera, M.^a L. (1989): Necesidad, posibilidades y obstáculos de la Animación Sociocultural en España. En Una Educación para el desarrollo. Buenos Aires: Humanitas. ICSA.

④Griéger, P. (1990): Animar la comunidad escolar. Madrid: Narcea.

⑤Marzo, A.y Figueras, J. M.^a (1990)⁽¹⁸⁾

(2) ASC を定義するための視点と性格づけ

「ASC とは何か」その特徴を捉えるために、Sara de Miguel Badesa は下記の15の項目を視点として掲げ、先の論者の諸定義を整理して一覧表を掲げている〔図表2〕。15の項目とは、「社会政策」「社会現象」「活動の総体」「指導のプロセス」「社会活動の技術」「関与のモデル」「方法論」「活気づけ・援助・意識づけ」「応用科学」「調停機能」「総合的な行為」「手段」「集団活動」「関与の方法」「努力喚起」である。

また、「ASC の目的は何か」についても、11の項目にそって分類している。11の項目は「参加」「自覚化」「社会と文化の発展」「人間のコミュニケーション」「生活の質」「社会の改革」「社会統合」「社会の活性化」「社会と教育の民主化」「個人の発達」「自発性の刺激と参加」である。

Sara de Miguel Badesa がとりあげた24冊の中から、何冊か(①⑩⑪)を取り出して、実際にその内容を検討してみたが、必ずしも図表2の分類のようにはっきりと区分できるわけではないが⁽¹⁹⁾、「ASC とは何か」についての様々な捉え方を鳥瞰する上では手がかりとなる整理である。

以上の検討を通じて、Sara de Miguel Badesa はASC に関して6つの性格づけ〔①価値の促進 (promotora de valores)、②改革の要素 (elemento transformador)、③参加の手段 (cauce de participación)、④触媒作用 (catalizador)、⑤連帯した生活の促進 (promoción de la vida asociativa)、⑥過程 (proceso)〕をしているが⁽²⁰⁾、それらは「ASC とは何か」を問う場合の共通項と言えるだろう⁽²¹⁾。

(3) 欧州評議会とユネスコにおける ASC の位置づけ

欧州評議会 (Concejo de Europa) は、1980年にその出版物の中で「人間性の成長発達はどうのような教育的・社会的・経済的環境にあらうと原理的目的でなければならない」と述べ、加盟国に対して、①表現の自由と多様性を保証すること、②あらゆる階層の市民が文化へのアクセスと参加を可能にすること、③成長発達の各段階に応じた文化活動を保障するための基礎的経済基盤を確立すること、④地方のレベルまで文化の普及をはかること、⑤文化運動の基準をつくり差異をなくす権利を定めることを呼びかけた⁽²²⁾。

また国連教育科学文化機関（UNESCO）は、1982年の出版物で加盟国に対して、①文化への自由なアクセスと参加の促進、②民族的文化の尊重と保護・保存、③生涯教育を通じての大衆の文化的生活や社会参加の促進、④文化サービスの組織化と参加方法の確立、⑤地方への文化の拡大と文化施設の設立、⑥青少年への自由時間の保障と文化活動・教育活動にかかわれるための措置、⑦市民が容易に良い文化にアクセスできるための財政措置を研究することを勧告している²⁸。

欧州評議会や UNESCO が提示した文化政策に関する基準や勧告を実現する方法の一つとして注目されたのが ASC であり、欧州評議会は、その一般方針の中に ASC を含む思想的枠組みをデザインした。特に、経済・政治・教育などに重大な影響を及ぼす文化的不平等の解決策として ASC の役割に期待を寄せた。ASC の取り組みによって市民の文化的参加を推進することが、社会の変革と発展につながるという文化における民主主義実現の観点に注目したからである。ただし、ASC の用語に関しては、ヨーロッパ諸国では表現の違いがある。フランス・スイス・スペイン・イタリア・ポルトガルでは ASC だが、ドイツでは Gesellschaftlich kulturell Anregung であり、イギリスでは Community Development と同義とされている²⁹。各国の用語と概念の違いについての比較研究が旺盛に進められている。

ヨーロッパにおける社会文化政策と ASC の役割についての Weber, R. の指摘が、その内容を包括的に集約している²⁵。少し長くなるが、その内容を6点にまとめておこう。

- ①人間性の最も奥深いところに、文化に対する深い欲求と、コミュニケーションの必要性が並存する。文化の発展には、人間と文化の所産と、世界をとりもつものとしてのコミュニケーションが必要不可欠である。
- ②文化のプロセスは、生活のあらゆる面がそうであるように、内面から、内面を通して経験されねばならない。コミュニケーションは必然的に集団の中から生まれてくる。文化的行動は、ほんの少しの活気づけを与えれば集団の中から芽生えてくるものであり、外部から責任者を与える必要はない。
- ③文化とはプロセスが重要なのである。受身的な傍観者ではなく、各個人が自分自身を発見し、表現し、問題を発見し、世界を理解し、より良い方法で目的に達するようにしなければならない。
- ④文化は単一ではありえず多元的である。社会から疎外された集団も含めて、それぞれが固有の文化の下で生活できるようにすることが大切である。
- ⑤ASC は、進むべき道を押しつけるのではなく、個人の自己実現を助け、社会のあらゆる階層にとって活動的で創造的な生活への参加を可能にすることである。それゆえ、アニマドールは「何をするか」ではなく「どのようにするか」に重点を置かねばならない。
- ⑥文化のための大きな施設を建設するよりも、アニマドールの養成のために投資し、文化を利用するネットワークを拡大することのほうが重要である。

欧州評議会や UNESCO が提示した文化政策は、「文化の権利」認識にもとづくものである。Grosjean, E. が指摘するように「文化の権利」を発展させることは「行政機関が推進する大事業だけでなく、すべての人の手の届くところにある発見・創造的イマジネーション・経験・責務のプロセスを含んでいると見なすヨーロッパ精神の表れ」⁽²⁶⁾ であり、ASC はこのヨーロッパ精神を実現するための優れた方法原理になっていると言えよう。

3. ＜社会文化アニマシオン＞における＜intervención＞の概念

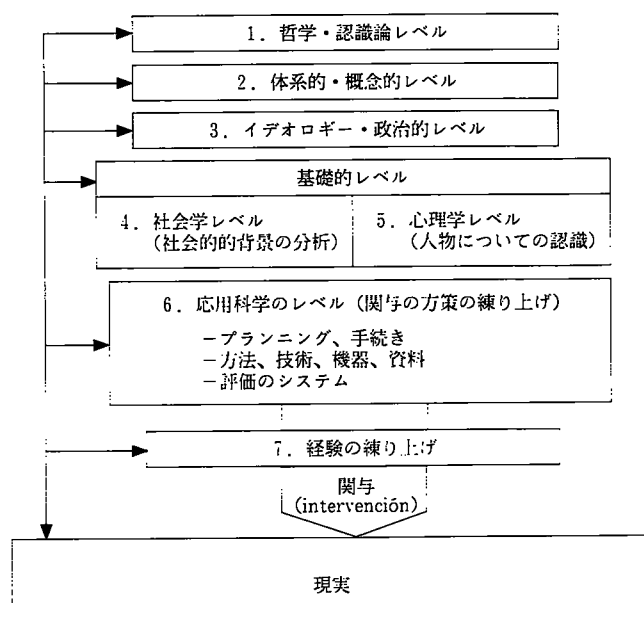
教育学の分野では、諸問題を分析して解決の方策を探るために、実践と理論の相互間をつなぐ手法としての「アクション・リサーチ (action research)」や「関与的研究 (intervention reserch)」が重要な方法論であることが知られている⁽²⁷⁾。ASC にとっても、その目的を実現するための方法として、「行動 (acción)」や「関与 (intervención)」が重要な要素となる。

Jauma Trilla は、先の論文の中で ASC の概念について述べた際に、＜acción＞と＜intervención＞の捉え方について言及している。そこでは、＜intervención＞の用語は動きが当事者の外側から来るようなイメージがあるので、より総称的でかつ当事者自身の動きにもとづいた＜acción＞の方を使いたいとしている⁽²⁸⁾。

確かに＜acción＞の方が総称的でかつ当事者自身の動きを感じる用語であるが、Jauma Trilla 自身も先の論文の展開の中で、「ASC の流れ—認識のレベル」に関する詳細な検討へ突き進んだ部分では、そのポイントのところで＜intervención＞の用語を使っている〔図表 3〕。ASC の方法概念の理解において＜intervención＞の概念は避けておれない重要な位置を占めているのである⁽²⁹⁾。

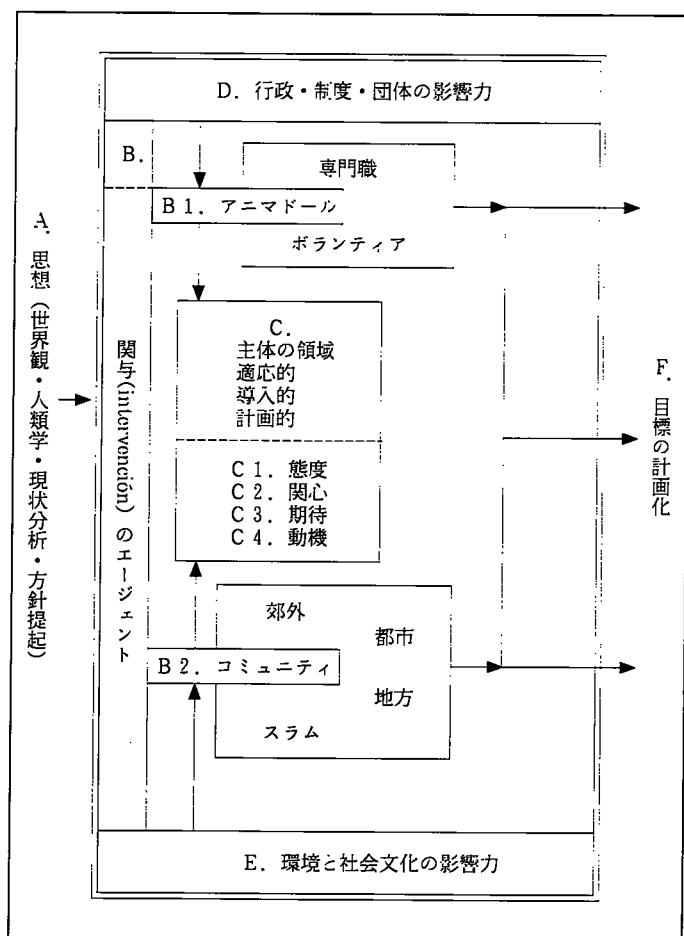
Xavier Ucar はその著の中で、ASC における＜intervención＞によって発達・発展を促す要素として、①「自覚化 (concientización)」、②「参加 (participación)」、③「統合 (integración)」、④「活性化 (dinamización)」、⑤「革新 (innovación)」、⑥「創造 (crea-

〔図表 3〕 ASCの流れ—認識のレベル



Jauma Trilla (2004): Animación sociocultural (Ariel Educación) p.33

〔図表4〕ASCの関与（intervención）のエージェント



Xavier Ucar (1992): La animación sociocultural (Ediciones CEAC) p.119

発達、寛容、柔軟性、創造性、信頼、誠実、尊敬などのキーワードと結びついているというのである³¹⁾。

つまるところ＜intervención＞とは何か。この言葉を辞書で引くと、どの辞書にも日本語訳は①「介入」「干渉」「統制」、②「調停」「仲裁」、③「関与」「参加」、④会計監査、⑤医学的処置という訳語が出てくる。＜intervención＞の用語が一般的に喚起するイメージは、軍隊による軍事介入、国家権力による政治的統制・干渉、医者による治療的処置など、主体の意思を超えて外部から与えられる圧力の意味で使用されることが多い。それらの訳語が持っているニュアンスは、確かに、実践主体の意思や内面世界の自由を重んじる「教育」や「文化」に関する概念には馴染まないものを感じる。

しかし、ASCにおける＜intervención＞の用語の本質的な意味は、各論者の解説および図表3

ción)」の6つの内容を示すとともに³²⁾、＜intervención＞のエージェントについて独自の整理を試みている〔図表4〕。

また、2005年に発行されたアニマドール向けのASC講座（Rosario Cerdá 他著）『文化アニメーション（Animación cultural）』（Altamar）の中では、＜intervención＞の「原理（principio）」が次のように説明されている。＜intervención＞は、「文化」「教育」「余暇・自由時間」「地域の発展」にかかわる領域において重視されるとともに、その原理は、①「民主主義文化（democracia cultural）」—自由、平等、多元主義。②「参加（participación）」—活動、自尊、自律、活性化、発見、対話、統合、連帯。③「エンパワメント（empoderamiento）」—批判的意識、動く意欲、向上、

に見られるように、認識論や体系的な概念をベースにして社会学・心理学・教育学などの学際的な視野を持ち、実践的な方法論と経験的な練り上げにもとづいて行なわれる対象への「関わり・働きかけ」の方法なのである。

辞書の訳語から選べば③の「関与」や「参加」がより相応しいものだが、厳密に捉えるならば<intervención>の概念は、①現実との「緊迫感のある関わり」、②実践対象への「臨床的な参画」、③解決が求められている課題への「的確かつ効果的で価値的な働きかけ」という意味が統合された概念である。

四. 日本の教育学と<社会文化アニメーション>

日本では、人間の成長や発達の問題は、主に教育学および心理学の課題として捉えられてきた。特に教育学では、学校教育が歴史的にも現実的にも非常に大きな位置を占めており、その対象が子どもの場合は、学校教育＝定型教育（educación formal）を中心に考えることが、今なお支配的である。

もちろん社会教育の分野も長い歴史を持っているが、それは主に成人や勤労青少年の分野を対象として発展してきたので、日本では長い間、社会教育＝成人教育（educación adultos）職業教育（formación ocupacional）と捉えられてきており、社会教育を educación social としては捉えてこなかった。

しかし、1950年代後半から1960年代にかけての日本社会の急激な構造的転換（農業社会から工業社会への転換）によって、学校を取り巻く地域社会（comunitario）の環境が激変し、子どもの学校外での生活・遊び・発達にかかわるいろいろな問題点が浮かび上がり、学校外の研究が必要が高まってきていた。1960年代から1970年代にかけて、ユネスコの生涯教育（educación permanente）の概念が紹介されたこともあり、子どもの教育への視点を学校教育＝定型教育（educación formal）のみに狭めることなく、不定型教育（educación no formal）、非定型教育（educación informal）の分野にも広げようとする機運が一気に高まった。

1970年代に入ってから、社会教育学（pedagogía social）の分野で、本格的に「学校外教育（educación fuera de la escuela）」という概念を用いた新しい研究が始まり³²⁾、その中から初めて、社会教育学は成人教育（educación adultos, formación ocupacional）を対象とするだけでなく、「子どもの社会教育（educación social de los niños）」という分野があるのだという考え方が登場してきた³³⁾。1990年代に入ると、学校型教育を超える視点を豊かにするために不定型教育（educación no formal）への注目が進んだ³⁴⁾。

日本の教育学の歩みの中には、余暇社会学や余暇論にもとづいて社会教育・生涯教育における余暇の問題を論述した長い研究蓄積がある³⁵⁾。しかし、子どもの生活・文化・教育の全体構造と実践活動に即しての「自由時間教育（educación en el tiempo libre）」や「余暇教育学

(pedagogía del ocio)」の研究へと広がってはいない。また「社会文化アニマシオン (animación sociocultural)」に関しては、その概念の日本への紹介が「社会教育」の枠内に置かれていたために、「文化 (cultura)」や「福祉 (bienestar)」や「地域社会 (comunitario)」さらには「マイノリティ (minoría)」や「遊び・祭り (lúdico-festivo)」の領域にも広がる諸活動・諸実践を、「社会教育 (educación adultos, formación ocupacional)」学校外教育 (educación fuera de la escuela)」の概念の中に含み込んで捉える視点から離れることが出来なかった。そしてその呪縛はいまなお続いている。

「教育」の分野・領域を超えて、社会や文化へと広がる力動的な実践・活動・運動を「教育」の概念のみで捉えるには明らかに限界があり、実践の発展と研究の発展のためには、独自の新しい概念を必要としている。＜社会文化アニマシオン (animación sociocultural)＞の概念は、これらの諸問題と課題を議論し、発展・深化させていく上で、もっとも相応しい概念であると考えられる。

ASC は、決して「教育」の概念を否定するための概念ではない。Ander-Egg の指摘のように「人々が自らの社会・文化の発展に参加することによって、生活の質の向上にむけてのさまざまな分野で役割を果たす」ための参加型教育方法によるアプローチなのであり³⁶⁾、したがってそれは活動の行為者を自己教育の主体にする「厳密な意味での教育」(A.Sánchez Sánchez) といえるものである³⁷⁾。

したがって＜社会文化アニマシオン (animación sociocultural)＞の概念は、「教育」の概念の独自性を尊重しつつ、それを活性化する機能をもっており、＜participación＞や＜intervención＞の概念を手がかりにしながら子ども（学習主体）と教師（教育主体）の関係を問い直して、本来的なく教育 (educación)＞の豊かさを取り戻していくためのキー概念と言えよう。

おわりに

スペインにおける ASC の研究は、隣国フランスの影響を受けつつも独自の発展を遂げ、新しい研究方向が模索されている。スペインにおける ASC の研究のリーダーの一人である Xavier Ucar (バルセロナ自治大学教授) は、スペイン、ポルトガル、イベロアメリカ諸国における ASC 研究の発展を踏まえつつ、先駆的にフランスで深められてきた ASC 制度化の模索と、イギリスで探求されている desarrollo comunitario (Community development) 理論との比較検討、さらにはそこに Arte (芸術) 分野の実践を組み込んだ独自の新しい概念構成を目指す開拓的な仕事をしている³⁸⁾。

また、近年の興味深い研究として Mario Viché が主張し始めた ASC から「サイバー文化アニマシオン (animación cibercultural)」の時代へという提起がある³⁹⁾。Mario Viché は、従来の研究にもとづく ASC の基本領域を、①教育 (educativo)、②文化 (cultura)、③地域生活の組

織化（estructuración de la vida comunitaria）の3つとして捉えつつ、さらに現代進みつつある知識基盤社会におけるサイバー文化（cibercultural）の重要性に着目して、そこにもanimaciónの視点を広げる必要があるという。グローバリゼーションが進むポスト・モダン社会では、これまで以上に市民の社会参加と市民権の拡張が必要であり、現代性と適合するASCのパラダイム転換が求められているというのである。

Mario Vichéの目は、主にインターネット時代の生活文化全般に向いているが、移民労働者や不法移民の多いスペインでは、経済格差や社会的排除の問題も深刻であり、マージナルな人々への配慮は、異文化と共生し円滑な市民生活を確立するために欠かせない課題になっており、ASCのパラダイム転換に期待が寄せられている。それら、ASCをめぐる新しい研究動向についての紹介およびその検討は他日を期したいと考えている。

注

- (1) スペイン語に翻訳されたものをとりあげるとUNESCO (1982): Conferencia intergubernamental sobre políticas culturales en Europa, Helsinki. など。
- (2) ヨーロッパにおける社会文化アニメーションの用語・概念の発生についての歴史的研究を本格的に開始した研究者がサラマンカにあるポンティフィシア大学のVentosa Pérez, V.である。Ventosa Pérez, V. (1988): La Animación Sociocultural en el Consejo de Europa. (1993): Fuentes de la animación sociocultural en Europa, Madrid, Poplar.がある。M.^a Teresa, Martín (coord.) (1999): Génesis y Sentido Actual de la Animación Sociocultural. Sanz y Torres. などにもヨーロッパ、ラテンアメリカ諸国の状況が報告されている。
- (3) ASC関係文献の整理を試みたものにAguilar, M.^a J. (1988): Bibliografía y documentación sobre animación sociocultural. (Caja de Ahorros de Alicante y Murcia, Alicante)がある。スペインですでに出版されたASC関係文献は膨大であり、その全体をつかむのは困難だが、筆者がバルセロナ大学やバルセロナ自治大学の図書館を通じて作成した著書文献リストによれば、1970年代（18冊）、1980年代（147冊）、1990年代（113冊）、2000年代（30冊）を数える。
- (4) フランスのASCおよびアニマトゥールの歴史と現状については、ジュヌヴィエーヴ・ブジョル他著、岩橋恵子監訳（2007）『アニマトゥール—フランスの社会教育・生涯学習の担い手たち』明石書店に詳しい。
- (5) 拙稿「生活を楽しむ文化を味わう—世界の子どもたち（8）スペイン」『教育』1993年12月号、拙著（1994）『ゆとり・楽しみ・アニメーション』旬報社、（2000）『アニメーションが子どもを育てる』旬報社など。
- (6) 1992年よりバルセロナ大学、バルセロナ自治大学、私立のラモン・ジュル大学にASCの理論と実践を含む新しい社会教育専門指導者（アニマドール）の養成課程（Dipromatura Universitaria en Educació Social）が開設されている。またバルセロナ市役所には、「アニメーション・遊び協会（Insutitut Municipal d'Animació i Esplai）」が置かれて、毎年定期的にアニマドールの養成講座が行われ、専門知識と実践力を持ったアニマドールが養成され、地域活動に派遣されている。
- (7) ①Mario Viché y otros (1989～): Colección Animación Sociocultural (Grup Dissabte) 全5冊、②Alfons o Francia y otros (1992～): Plan de Formación de Animadores (Madrid. CEAC) 全38冊、③M.^a Teresa Martín, M.^a Luisa Sarrate (Coordinadoras) (1999): Evaluación y Ámbitos Emergentes en Animación Sociocultural. (Sanz y Torres) 他4冊、④Del Ciclo Formativo de Grado Superior de Animación Infantilのシリーズには、Rosario Cerdá y otros (2005): Animación cultural (Altamar) などを含む全3冊がある。
- (8) この著はASCに関する体系的な理論書であり、それぞれ5テーマの論文を含む4部構成になっている。第

1部「基礎理論と歴史」(①ASCの概念と歩みとその世界、②ASCのパラダイム理論、③スペインにおけるASC発展の歴史と前歴、④ASCの比較研究の視点、⑤ASCの研究方法论)、第2部「方法と計画と技術」(⑥社会文化アニマドール像とその養成、⑦ASCのプロジェクトとプログラムの練り上げ、⑧社会文化機関の組織化と経営、⑨ASCの関与のテクニック、⑩ASCの評価)、第3部「対象とする人々と領域」(⑪子ども期のASC・自由時間の教育、⑫青年期のASC、⑬ASCと成人教育、⑭高齢者のASC、⑮困難を抱えた社会周辺に生きる人々へのASC)、第4部「現在の論議と未来への展望」(⑯ASCの専門性とボランティア、⑰ASCとコミュニティの発展、⑱市民による市民文化の管理、⑲ASCと福祉、⑳余暇とASC—その現在と未来)という構成である。

- (9) 教育学の近似概念とASCの関連については、1980年代を代表する著書J. M. Quintana 編(1986)『社会文化アニマシオンの基礎(Eundamentos de Animación Sociocultural)』(Narcea)をはじめ、多くの著書で検討されてきた。J. M. Quintana は編著の巻頭に「生涯教育および成人教育の枠組みにおけるASC」と題する論文を寄せているが、そこでは「<生涯教育>、<成人教育>、<ASC>は相互に関連した概念であるために互いに混同されやすい」と述べつつ、最終的には「<生涯教育>の二次的結合体として<成人教育>と<ASC>が存在する」(同書、P16~17)として、ASCを教育の概念の中に包含している。著者によって、関連諸概念の整理は様々であり、定説は見当たらない。図表1は、ASCと教育学の諸概念についてJaume Trillaと基本的に同じ見解をとっているXavier Ucar(1992): La animación sociocultural, Ediciones CEACのP.47の図に筆者が余暇教育学(Pedagogía del ocio)を加筆したものである。Jaume Trilla、Xavier Ucar両氏との研究交流を通じて、この図のような概念整理が妥当であることを確認している。
- (10) 編集者は、Alfonso FranciaやVictor J. Ventosaらスペイン各地を代表する研究者と実践者16人からなる。4つのテーマ群〔①アニマシオンの今日と明日(5冊)、②アニマドールのあり方とやり方(4冊)、③アニマドールの知識(6冊)、④アニマドールの実践知識(23冊)〕から構成されている。この講座の目的は社会文化アニマドールの養成にあり、求めたい資質として「現実の社会に入り、ヒューマニストとしての姿勢を自覚し、集団の一員として、批判的分析能力、創造的能力、社会的弱者と連帯する能力、楽天的能力、変革的能力をもった人」を掲げている。
- (11) Ambles, H. (1974): Information et animation socioculturelle, Tema Paris. P.188
- (12) Jaume Trilla (1997): 「ASCの概念と歩みとその世界」『社会文化アニマシオン—理論・計画・領域(Animación sociocultural-Teorías, programas y ámbitos)』Ariel Educación. P.18
- (13) Antonio Sánchez Sánchez (1992): La Animación Hoy, Editorial CCS, Madrid. P.38
- (14) 同前 P.17
- (15) ASCの用語とならんで、Dinamización SC, Promoción SC, Acción SC, Desarrollo SCなどの用語も使用されている。
- (16) 1999年出版のM.ª Teresa Mrtín 他編集による『ASCの起源と今日的意味(Génesis y Sentido Actual de la Animación Sociocultural)』(Sanz y Torres)の中には、Sara de Miguel Badesaによる(1995):『社会文化アニマドールのプロフィール(Perfil del Animador Sociocultural)』(Narcea)の文章がそのまま引用され、新たに出版された3冊を加えた27冊をとりあげてASC概念把握のポイントが示されている。この著に新たに付け加えられているのは、①Froufe, S. (1995)、②Gillet, J. C. (1995)、③De Miguel, S. (1996)の3人である。引用文献名が明示されていないので、著書名は分からないが、①はDesarrollo Comunitario y Animación Sociocultural. Perspectivas racionales. (Madrid, Eudema)と思われる。また、②のJean-Claude Gilletに関しては、2006年La animación en la comnidad, Un modelo de animación socioeducativa. (Editorial GRAÓ)がスペイン語版として翻訳出版されている。
- (17) 出版年は1988年の誤りである。上記M.ª Teresa Mrtín 他編集の著書でも、誤りのまま転載されている。
- (18) Sara de Miguel Badesaの著書に中に取り上げられている24冊の著書は、本文からの引用のみで引用図書名が示されていない。文献索引などを通して、全て調べ直してみたが、③の文献名は現時点でまだ確定でき

ていない。

- (19) たとえば、@Quitanaの編著書 *Fundamentos de animación sociocultural* は、「社会政策」「応用科学」「関与の方法」の3種類にマークされているが、この著の第5節では「教育とASC—関与のモデル (modero de intervención) としての教育学」について詳しく論じられている。したがって図表の「関与のモデル (moderos de intervención)」の項目についてもマークされるべきであろう。同様のことが、他著でも指摘できる。
- (20) 通信教育大学 (UNED) の教員たちによって2006年に出版された『ASC とは何か (Qué es la Animación Sociocultural)』の中では、ASC の性格について、さらに「教育学として (como pedagogía)」「永続性と連続性 (permanencia y continuidad)」の2項目が付け加えられている。
- (21) Jaume Trilla は前掲論文「ASC の概念と歩みとその世界」の中で ASC の性格として、①「活動 (acción)」「関与 (intervención)」「行動 (actuación)」、②「社会的活動 (actividad social)」「社会的実践 (práctica social)」、③「方法論 (metodología)」「技術論 (tecnología)」、④「過程 (proceso)」、⑤「プログラム (programa)」「プロジェクト (proyecto)」、⑥「社会機能 (función social)」、⑦「要因 (factor)」の7点を挙げている。
- (22) Consejo de Europa (1980): *Les finalités culturelles du développement*, Cahier JEB. 6, Bruselas P.57
- (23) UNESCO (1982): *Conferencia intergubernamental sobre políticas culturales en Europa*, Helsinki. P.16
- (24) Sara de Miguel Badesa (1995): *Perfil del Animador Sociocultural*, Narcea. P.37 または Ventosa Pérez, V. (1988): 『ヨーロッパ評議会における ASC (La Animación Sociocultural en el Consejo de Europa)』Salamanca. および Jaume Trilla 編『社会文化アニメーション』所収の論文「ASC の比較研究の視点 (Perspectiva comparada de la ASC)」に詳しい。また M.ª Teresa Martín (1999): 『ASC の起源と今日的意味 (Génesis y Sentido Actual de la Animación Sociocultural)』Sanz y Torres. では、フランス、ドイツ、イギリス、スイス、ポルトガル、東ヨーロッパ、中南米、そして北アメリカにおけるアニマドル養成に関する国際比較がなされている。
- (25) Weber, R. (1985): *Europa ante la acción sociocultural*, En Ministerio de Cultura. *Cultura y sociedad*, Madrid. P.113-126
- (26) Grosjean, E. (1983): *Animation et gestion pour un développement culturel*, En *La formation des animateurs*. Cahier JEB, 5, Bruselas. P.56
- (27) バオロ・フェデリーギ編、佐藤一子・三輪建二監訳 (2001) 『国際生涯学習キーワード事典』東洋館出版社、P.192
- (28) Jaume Trilla 注 (12) と同じ。P.22
- (29) たとえば <intervención> に注目した著書に Mario Viché (1989): *Intervención sociocultural*, Grup Dissabte. や Xavier Ucar (1992): *Animación y teatro. Técnicas de intervención*. Ed. Diagrama, Madrid. などがある。
- (30) Xavier Ucar (1992): *La animación sociocultural*, Ediciones CEAC. P.63
- (31) Rosario Cerdá y otros (2005) *Animación cultural*, Altamar. P.7-9
- (32) 酒匂一雄編 (1978) 『地域の子どもと学校外教育』(日本の社会教育第22集) 東洋館出版社。吉田昇編 (1979) 『学校外教育』(講座現代社会教育第7巻) 亜紀書房など。
- (33) 拙著 (1989) 『子ども研究と社会教育』青木書店。
- (34) 鈴木敏正 (1997) 『学校型教育を超えて—エンパワーメントの不定型教育』北樹出版。
- (35) 瀬沼克彰による余暇論、生涯学習と余暇、余暇教育学の研究が先駆的である。同著 (1979) 『余暇教育の設計』文和書房から、(2008) 『西洋余暇思想史』世界思想社などまで、その研究蓄積は豊富である。
- (36) Ander-Egg, E: *Práctica de la animación sociocultural*, en Quintana Cabanas, J. M.ª (1985): *Fundamentos de animación sociocultural*, Narcea, Madrid. P.177

- (37) Antonio Sánchez Sánchez (1992): La Animación Hoy, Editorial CCS. P.17
- (38) 南米のASCに関しては、Victor J. Ventosa が会長を務める RIA (Red Iberoamericana de Animación Sociocultural) がある。また、2003年より2年おきにASCに関する国際的研究集会が開催されており、「世界におけるASC」をテーマとする第1回大会（フランス）で、Xavier Ucar は Medio siglo de Animación Sociocultural en España (balance y perspectiva, en OEI Revista Iberoamericana de Educación) について発表をしている。
- (39) Mario Viché Gonzáles (2007): La Animación Ciber-cultural, Libros Certeza.